

*** 初代国立天文台管理部長新井輝隆氏の瑞宝小綬章お祝い昼食会**

1988年7月1日、国立天文台が設立された。それまで100年の歴史のあった東京天文台が、緯度観測所、名古屋大学空電研究所太陽電波部門とともに、国立大学共同利用機関に改組転換された。その国立天文台初代管理部長であった新井輝隆氏(写真1)が2008年秋の叙勲で瑞宝小綬章を受章された。長年の文部行政の功績をたたえての受章である。氏は国立天文台管理部長の後、岩手大学事務局長、岡山大学事務局長などを歴任されて、現在は井上科学振興財団の事務局長をされている。



写真1 国立天文台初代管理部長 新井輝隆氏

今回のお祝いの昼食会は、当時、新井管理部長の下で会計課長を勤められた森豊吉氏の音頭でもたれたもので、多くは大型光学赤外線望遠鏡「すばる」の予算獲得に頑張った面々である。参会者は当時、予算獲得の現場にいた新井輝隆管理部長、河合庶務課長、森豊吉会計課長、朝日向会計課長補佐、佐々木司計係長、大型光学赤外線望遠鏡推進室総務の中桐をはじめ、田中元会計課長補佐、井山元施設課長補佐、平賀元共同利用係長、技術部から元技官の大塚富美子、森敬子、そして大橋満、川合元野辺山会計主任の 13 人であった。写真 2 が昼食会で披露された勲章である。



写真 2 新井輝隆氏が受賞した瑞宝小授章の徽章

国立天文台創設時の大きな目標のひとつは大型光学赤外線望遠鏡の予算を通すことであったから、管理部長、会計課長はその予算獲得に必死であった。その苦労話、裏話に花が咲いたのは言うまでもない。いくつかの裏話は、まだ解禁されない話であった。苦労話では、司計係長などが天文台を出る頃には正門にタクシーが待っているという、今時の居酒屋タクシー状態（もっともこの頃は運転手からのサービスはなかった）だった毎日、深夜のタクシーで帰宅、そして翌日には定時の出勤時間には出勤していたという過酷な勤務を振り返っておられた。大型光学赤外線望遠鏡推進室にいた筆者も司計係長から「もう文部省からの質問はありません」という言葉をもらうまでは帰宅できなかったのである。また、当時はインターネットもなく、パソコンも今のように発達しておらず、書類はワープロで作成し、FAX でやり取りをしていたのであった。大型光学赤外線望遠鏡建設はNHKの「プロジェクト X」でも取り上げられた。この番組はプロジェクトの責任者であった小平教授と予算獲得の実務担当者であった森会計課長の奮闘にスポットを当てたものであった。

しかし当然ながら、古在会長をはじめとする国立天文台関係者の並々ならぬ努力と長谷川学術国際局長をはじめとする文部省関係者の尽力なくしては、成し得なかった事業であ

る事が裏話を交え話された。写真3が記念写真である。



写真3 祝賀昼食会の記念写真

写真3の面々は、前列中央が新井輝隆氏、前列左から河合、大塚、新井、森敬子、森豊吉、後列左から川合、大橋、田中、井山、平賀、中桐、朝日向、佐々木の各氏である。

この記事は、アーカイブ室新聞の記事として適当かという疑問をおもちの方もあろうが、こういった記事はオーラルヒストリーに属するものでやはり記録にとどめておく必要のある歴史的事項であろうと思う。